

あきはじんじや
秋葉神社

春日部駅西口の南方、地下歩道出入り口のわきにある社が秋葉社である。あきはしや

この社は古くから防火の神として信仰されているやしろ（管理は富士見町）。

もとは駅の西口前にある大銀杏の下に鎮座していたが、おおいちよう区画整理事業により現在地に移転したものである。ちんぎ

秋葉社について、つぎの伝説がある。

ある年の十二月、北西の風が強く吹く夜のこと、粕壁宿の名主多田次郎兵衛の邸内の裏手なぬしただじろべえ（屋敷は旧四号国道から駅西口広場までの広大なものであった）に何物かが落下した物凄い地響きがあつた。

家人が驚いて飛び出してみると、六尺余りおおやり（二尺）の大槍を携えた一人の六部ろくぶ（修験者）が立っていた。

次郎兵衛は、驚き騒ぐ家人を制して、六部を客間に招じて丁寧にもてなした。

数日後、六部は笈おいの中から一個の包みを取り出して次郎兵衛に与えると、別れを告げて風のように消えさつた。

次郎兵衛が何気なくこの包みを解いてみると、中から現われたのは、秋葉権現あきばごんげんの御神体ごしんたいであつた。

次郎兵衛は、さては今の六部は秋葉山からの使者か、または秋葉権現あきばごんげんの化身けしんに違いないと怖おそれて、六部の降りたつた場所に祠ほこりを建てた。

これが秋葉社であると伝えられている。

昔、粕壁宿には河内屋火事、ろうそく屋火事、島村火事、妙楽院火事等の大火があつた。

鎮火する時にはその都度つど、大きな火の玉がこの社に落ちたとも伝えられている。

ある年、三枚橋きざうどの喜蔵床きざうどが火元で大火になり、宿の家並が類焼し火は新々田しんしんでん（一宮町いちのみやまち）の源げん徳寺とくじにせまつた。

この時、寺の山門に異様な風体ふうていの人影が現われ、手にした団扇うちわのようなもので降りそそぐ火の粉こを振り払うと、不思議や風向きが変わり火事が鎮まりしず、寺は難を免れたまぬが。

人々はこの奇蹟きせきを神かみの加護かごと信じたという。

この社の祭日（春 四月十八日・秋 十二月十八日）に雨が降るときは、神の怒りの示現しげんであると信じられ、伝説として語り伝えられている。

境内に奉納記念碑がある。

かぐつちの 神のいかりの しずめとや あきはの森に 雨は降るらん

明治十七年三月 春日部孝純

春日部孝純とは、名主かめじゆうろう亀十郎である。

初出「広報かすかべ 昭和五十二年四月号」かすかべの歴史余話